

審査論文の要旨

7世紀から9世紀にわたって中国に君臨した唐王朝、とりわけ玄宗以前のその前半期の歴史は、日本とも深い関わりをもっており、世界史上きわめて重大な意義がある。本学位請求論文は、その唐代前期における中国の王権の特質、およびその推移を描き出すことを目的として執筆されたものであり、当該期に三たび举行された「封禪」という祭祀儀礼をつぶさに分析したことが、最大の特徴をなす。全体三章および序論・終章からなるその要旨は、以下のとおり。

序論

序論では、題目にある「封禪」という祭祀儀礼を定義づけたうえで、それに関わる学説史を回顧検討し、唐代前期のそれが問題となるゆえんを説く。封禪の研究が秦漢時代に偏する一方で、唐代の封禪に関する知見が手薄であり、なかんずくそこで三代たてつづけに「封禪」が举行された経緯・意義・影響をいまだ解明していない先行研究の現状と限界を指摘する。それを打破すべく、唐代前期に行われた「封禪」そのもの、およびそれに関わる諸問題を具体的な考察の対象として、唐代前期の「王権」の性格を論じることを研究の主眼とする、と述べる。

第一章「高宗の封禪」

本章は、高宗の乾封元年(666)に举行された、いわゆる「乾封度封禪」をとりあげ、その儀礼構造を詳細に検討することを通じて、当該時期の王権を考察したものである。まず、従来通例の封禪儀礼は「封礼(封祀礼+登封礼)」と「禪礼」から成っていたのに対し、乾封度封禪ではこれに「朝覲礼」を加えて「四礼三部構造」となったことが、最大の特徴であると指摘する。

「朝覲礼」は周辺諸族が参列し、天子と会見して、君臣関係を締約する会同儀礼である。それが封禪の儀礼に加わったのには、当時の国際情勢が作用していた。すなわち、前代の太宗朝に東突厥が瓦解し、麾下の諸族が唐に帰順しており、また高宗朝では白村江の戦いを経て、朝鮮半島情勢が沈静化した、という情勢である。そうしたなか、唐朝が封禪を実施したのは、皇帝を中心とする天下世界の秩序を新たに構築するねらいがあった。ここに前代までの封禪と異なる特徴があり、唐代における王権の性格と封禪の再編との関係をうかがうことができる。

第二章「武後の封禪」

本章では、高宗の皇后で、唐を中絶させた則天武后が万歳登封元年(695)に举行した封禪の儀礼構造とその特色を検討して、この時期、大きく転換する王権の性格を解明する。武後の封禪の儀礼構造じたいは、高宗のものとはほとんど変わるところはなかった。しかし

その位置づけはまったく異なっている。

武后は封禪を実施するにあたり、自らの尊号を「天冊金輪聖神皇帝」とした。この「金輪」とは、仏教至上の君主「金輪王」で、東西南北の「四天下」を統治する君主である。武后は仏教を利用して女性皇帝を正当化すると同時に、唐王朝の皇帝権を超越する王権を構築しようとしたのであり、「金輪王」が挙げる封禪が、その端的な表現であった。すなわち、中国皇帝が天下を秩序づける封禪の儀礼に、「金輪王」の「四天下」に対する「化迹」を仮託したのである。この祭祀儀礼を通じて、武后は「四天下」を統治する「金輪王」となって、一つの天下しか統治しえない中国皇帝の上位に立つ新たな王権の構築を企図したのである。

第三章「玄宗の封禪」

本章は、武周革命の後をうけ、唐の中興をはたした玄宗が開元13年(725)に挙行した封禪を検討し、武后で大きく転換した中国の王権のゆくえをさぐる。玄宗の封禪儀礼は、やはり「封礼一禪礼一朝覲礼」という「三部構造」で、高宗そして武后のものとはほとんど変わるところはなかった。しかし先代と同一だったとみなすわけにはいかない。

玄宗の封禪で前代と異なるところは、封禪楽が制作演奏されたことにある。この音楽は宗廟制度の改変に伴って制作された宗廟楽とともにできたもので、玄宗は封禪挙行に先立ち、七代の祖宗を祀った宗廟を九代に改めている。この一連の礼制改革をリードしたのは、張説を中心として集賢院に結集した新進科挙官僚であった。前代には存在しなかった官僚層が『大唐開元礼』を成立させるなど、唐王朝とその正統性の復活、および唐本位の天下秩序再構築の表示をめざしたのである。封禪もその一環であって、そこに玄宗以後の王権の性格を見いだすことができる。

終章

終章では以上三章にわたる考察を通じ、唐代前期の封禪を時系列にあとづけて、その性格を大きく二つの論点に帰納する。

まず封禪自体の性格である。封禪は郊祀や宗廟のような定型化・定式化した国家儀礼とは異なって、不定期かつ前例の少ない祭祀儀礼として、多義的な目的を含ませることが可能であり、そうした機能を新たな王権構築に生かしたのが、唐代前期のあり方だった。高宗・武后・玄宗の三代で儀礼構造は共通しながら、それぞれの意義づけが同じでなかったのも、そのためである。

第二に、三代の封禪それぞれの目的と意義である。高宗のそれは周辺諸族の参列のもとに締約される会同儀礼であり、天下世界の秩序が再構築されたことを示すものだった。次の武后は高宗の儀礼をひきつぎながらも、金輪王の化迹をそこに仮託し、皇帝に優越する王権の祭祀として封禪を実施した。玄宗の封禪は同じく高宗の儀礼を踏襲していたものの、武后の王権を否定し、唐王朝の再興を示す目的であり、しかもその担い手が新進科挙官僚

で、一連の礼制改革の一環だったところがきわだっている。

経書に直接的な由来のない封禪は再編が容易だったため、天下に君臨する王権のありようを模索した唐代前期に、恰好の祭祀儀礼として着目、活用されたのである。